

## 21世紀の日本のかたち（95）

### 東日本大震災復興6年目に向けて —岩手県—



戸沼幸市

<（一財）日本開発構想研究所 代表理事>

2011年3月11日の東日本大震災の発災から今年3月11日で5年が経ちました。

この日、盛岡から早春の北上山地を越えて、宮古市田老地区に入り、太平洋に胸を張るように突き出した陸中海岸沿いに南下し、山田町、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市の被災地を地元のタクシーで、あの日の巨大津波に重ねて海を見つめつつ巡りました。

#### 1. 津波太郎 — 田老の復活

過去、幾度も巨大津波を経験し、海に向き合って暮らし生きてきた人々は、命を奪われながらもその都度、不死鳥のように復活を遂げてきた津波太郎、宮古市田老地区も5年経ってよほど復旧、復活したように見受けられました。

田老が誇っていた高さ10m、全長2.4kmの防潮堤は、5年前の大津波で半壊しましたが、新しい防潮堤、14.7m となつてがっちり再建されておりました。

この田老防潮堤に登って、3月11日午後2時46分、300人の地域の人々が手をつないで海に向かって黙祷を捧げておりました。

震災後、高台に造られた仮設団地では毎年、春祭りや盆踊りが行われ、田老の人々の団結力が強いのだと仮設商店「たろちゃんハウス」の店の人が語ってくれました。

防潮堤の再強化に合わせた田老地区の復興プロジェクトにはUR都市機構も関与していますが、防災集団移転事業による高台（海拔 40～60m）移転では、三王団地の住宅建設が始まっております。

津波で7割近くの家屋が消失した低地部の土地区画整理事業によるまちの嵩上げ（19ha）は進行中です。

震災によって加速された人口減少下、巨大な防潮堤によって海（浜）と隔てられて、ここにどれだけの人が戻るのかが直面する課題です。

写真1 「田老の防潮堤」の上で手をつなぎ黙とうする地域住民（約300人が参加＝午後2時46分、宮古市田老）



岩手日報、2016.3.12

写真2 田老の津波を記録するベンチマークの塔（今回16mを超える）



撮影戸沼

防災教育の観光拠点として「たろう観光ホテル」を宮古市が取得し、震災遺産として残すことになっています。6階建ての3階部分まで津波によって破壊されたこの建物をそのまま保存活用する計画です。津波太郎復活物語の拠点となることでしょう。

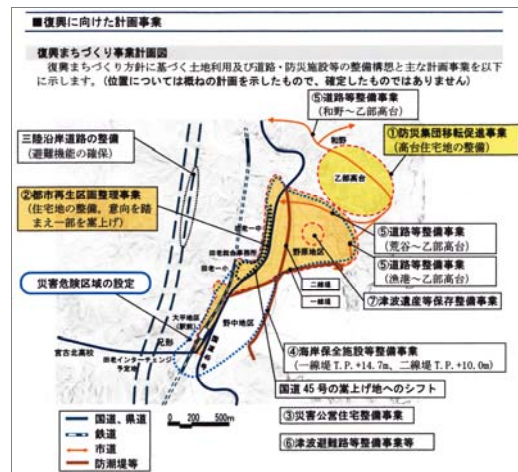
漁業については、三陸わかめの収穫が始まっておりますが、田老地区も含め、三陸被災地の基幹産業である漁業、水産加工業は、担い手がないという問題に直面しています。震災により、高齢化に加え過疎化が進んだ地域では、漁業を受け継ぐ後継者難があり、加えて水産加工業の人材が災害復興の労働単価の高い建設、土木事業に流れているのです。震災5年目、東日本震災復興のジレンマです。

写真3 田老の海



撮影戸沼

図1 復興まちづくり事業計画図



宮古市資料

## 2. 3.11 陸中海岸の風景

5年前の3月11日、太平洋の巨大津波によって被災した陸中海岸は長大な自然史の裡に、海と陸のせめぎ合いで生まれた独特の景観を持っています。

巨大津波でも立ちつくした三王岩のある田老海岸、これに続く浄土ヶ浜、流紋岩の白い岩肌、緑の松と青い海の浜辺は、極楽浄土のごとといわれています。

写真4 宮古市浄土ヶ浜



撮影戸沼

これに続く重茂半島の<sup>トド</sup>鮫ヶ崎は本州最東端です。いずれも陸中海岸の原風景です。

この3月11日14時46分、私どもは山田湾に立ち、時に海辺の人間居住を脅かす海を想像しつつ手を合わせたことでした。

写真6 山田湾 3.11 14:46 手を合わせる



撮影戸沼

この日は釜石大観音のある釜石港湾岸を経て、大船渡に入り、綾里湾奥にある廣洋館に宿をとりました。この宿は湾につながって、広い太平洋が続いていることが実感される場所にありました。この湾にも太平洋が黒い海となって盛り上がり押し寄せてきたのです。夜になると早春の海の上に星空が広がって、岩手の詩人、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」を想起させるものがありました。

翌朝5時頃に朝日が昇る光景は、いかにも地球は自転していることを実感させるものでした。

写真5 大船渡、3.12の朝焼け(廣洋館から)



撮影戸沼

人間が生きる地球の自然を学習する格好の場所が、岩手の陸中海岸には多々あり、今度の東日本大震災をベースにした防災教育の観光も、自然に生きる人間の営みを根本から問い直す大きな視野からのものにちがいません。

### 3. 海と緑と太陽との共生、海浜新都市の創造—陸前高田震災復興計画

前回の訪問(2014.04.17)から2年ぶりに陸前高田を訪れました。今泉地区の山を削って高田地区に大量の土を運んでいた長大なベルトコンベアは仕事を終えて撤去され、ようやく高田地区での敷地造成が一山越えた様子でした。

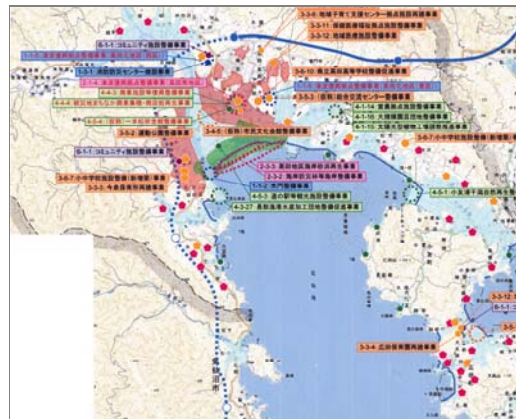
津波で被災した高田地区では、12m の嵩上げで造成された186.1ha の敷地、商店街と1,481 戸の住宅建設が想定され、他に大きな新団地として今泉地区113.0ha には483戸が想定されています。その他、いくつかの防災公営集合住宅団地を被災地域に点在させ、これらを平成29年度～30年度には完成をめざすというのが市の大まかな都市計画です。

写真7 陸前高田(敷地造成) 2016. 3. 12



撮影戸沼

図2 陸前高田の復興事業



陸前高田市資料

図3 「陸前高田復興NEWS」第21号



陸前高田市復興対策局 編集・発行、2015.3

問題は用意された造成地に想定通りに人口が戻るのかです。陸前高田市の人口は、2011年2月 24,246人、2013年12月 20,565人、2016年2月 19,746人と階段状に人口減が続いております。震災後5年が経ち、他地域への人口流出、特に若年層の他地域への移住が目立ちます。

高田地区に想定される中心商店街が居住人口の縮小の中にあって、元の姿に復興するのも容易ではないと思われます。他地域からの施設や企業誘致も定かではない様子です。

市の都市計画では40人/ha 程度の市街地を想定していますが、現段階で新市街地づくりと人口について規模縮小のプログラムも入れて一度見直すべきと考えます。

陸前高田市は「海と緑と太陽との共生—海浜新都市の創造」を掲げて、様々な困難の中で、

5年前震災直後からの復旧、復興、新都市創りに向き合ってきました。

高田松原7万本のうちの一本が奇跡的に残り、今や岩手県震災復興のシンボルです。「奇跡の一本松」は原寸大の擬木となりましたが、今も海に向かって立ち続けております。これにつなげて、高田松原の復活をめざし、陸中海岸の原風景の回復につなげてほしいものです。海側に「高田松原津波復興記念公園」づくりの構想などもあり、これも含めて、海と緑(森)の海浜新都市づくりを実現してほしいものです。

写真8 陸前高田(奇跡の一本松)、2016. 3. 12



撮影戸沼

陸前高田市の戸羽太市長は、「魅力ある街づくりとして世界中の人に来てもらおう」「ノーマライゼーションという言葉のいらぬまちづくり」「10万人都市づくりを目指す」としています。(「潮」2016年4月号)

陸前高田市には市と岩手大学、立教大学が協定を結んでサテライトキャンパスづくりの話も進んでいる様子です。「人口」については、いわゆる定住人口ではなく、観光人口、多地域住居や人口縮小時代のモデル都市、原風景を復活しつつ、輝くような小都市づくりを目指してほしいものです。

#### 4. 東日本大震災5周年、岩手県復興計画の課題と人口ビジョン

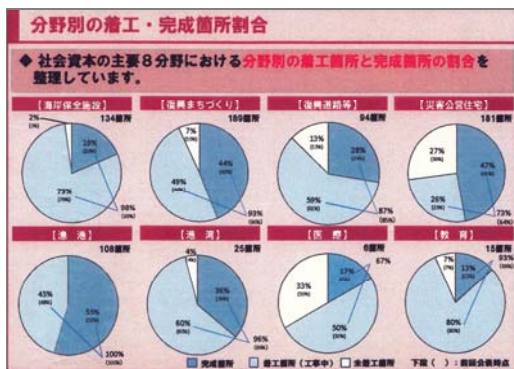
陸中海岸被災地見学の前日、岩手県復興局を訪ね、担当の方々から復興計画の進捗状況と問題点についてヒアリングの機会を得ました。前回、2014年4月のヒアリングの時と同様、岩手大学の三宅諭准教授が同伴してくれました。

岩手県の復興計画は第1期基盤復興期(平成23～25年)を終えて、第2期本格復興期(平成26～28年)の最後の年にあたります。これが第3期、更なる展開の連結期(平成29～30年)に続くと予定されております。

復興計画の3本柱は、「安全」「暮らし」「なりわい」ですが、安全の項目に入っている防潮堤、交通施設、宅地造成、土木・建設事業などは終盤に入っています。しかし、「暮らし」「なりわい」については多くの課題が残っている様子です。

これについて、社会資本の主要8分野、①海岸保全施設、②復興まちづくり、③復興道路、④災害公営住宅、⑤漁港、⑥港湾、⑦医療(病院・診療所)、⑧教育(小、中、高等学校)についての事業進捗のデータがあります。これを見ると、ハードな施設づくりは進んでいます。住宅、医療の分野が遅れていることがうかがわれます。

図4 分野別の着工・完成箇所割合



岩手県復興局まちづくり再生課 2016.1.25

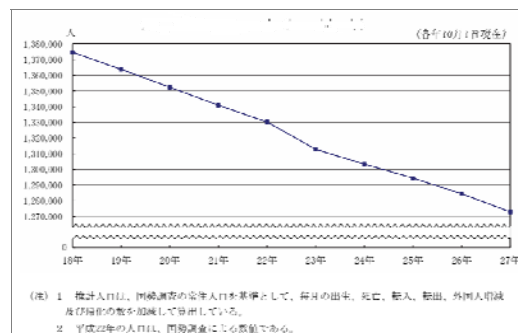
これに関する工程上の主要課題は①自治体職員の不足、②労働者や建設資材の不足、③用地取得期間の長期化などであり、いずれも相当な難問と見受けられます。

今回の岩手県でのヒアリングで私自身、もっとも関心を持っていたのは岩手県の人口見通しです。2011.3.11の東日本大震災は、東北における人口減少、少子高齢化を加速させました。この状態の中で、被災海岸居住域と内陸居住域をどのような人口想定でどのように調和的に捉えるのか。これによってインフラのスケールやつくり方、その維持保全に新しい問題が生じます。

#### 岩手県の人口

岩手県の人口は、戦後から2000年まで140万人台を確保しておりましたが、2000年代に入ると人口減少に転じ、平成18(2006)年 1,374,699人、平成22(2010)年 1,330,147人、平成23(2011)年 1,312,756人、平成27(2015)年 1,272,891人と推移しています。

図5 岩手県の人口の推移 (平成18年～27年)



平成27年岩手県人口移動報告年報、岩手県政策地域部

沿岸圏域の人口は、東日本大震災津波によって大きく減少しました。

図6 沿岸市町村からの人口流出

	H23.3.1人口(人)	H27.4.1人口(人)	増減(人)	増減率(%)
洋野町	17,775	16,449	△ 1,326	△ 7.5
久慈市	36,789	35,235	△ 1,554	△ 4.2
野田村	4,606	4,201	△ 405	△ 8.8
菅代村	3,065	2,871	△ 194	△ 6.3
田野畑村	3,838	3,513	△ 325	△ 8.5
岩泉町	10,708	9,672	△ 1,036	△ 9.7
宮古市	59,229	55,251	△ 3,978	△ 6.7
山田町	18,506	15,696	△ 2,810	△ 15.2
大槌町	15,222	11,574	△ 3,648	△ 24.0
釜石市	39,399	35,375	△ 4,024	△ 10.2
大船渡市	40,579	38,197	△ 2,382	△ 5.9
陸前高田市	23,221	19,174	△ 4,047	△ 17.4
沿岸計	272,937	247,208	△ 25,729	△ 9.4
内陸計	1,053,706	1,028,804	△ 24,902	△ 2.4
累計	1,326,643	1,276,012	△ 50,631	△ 3.8

出典：岩手県政策地域部「岩手県毎月人口推計」

「岩手県人口ビジョン～地方が主役になる日本を岩手から」平成27年10月 岩手県

### 岩手県人口ビジョン

岩手県の将来人口は、2040年、楽観曲線で103.9万人、悲観曲線で93.8万人と推計しております。更に2060年に安定した人口構造として

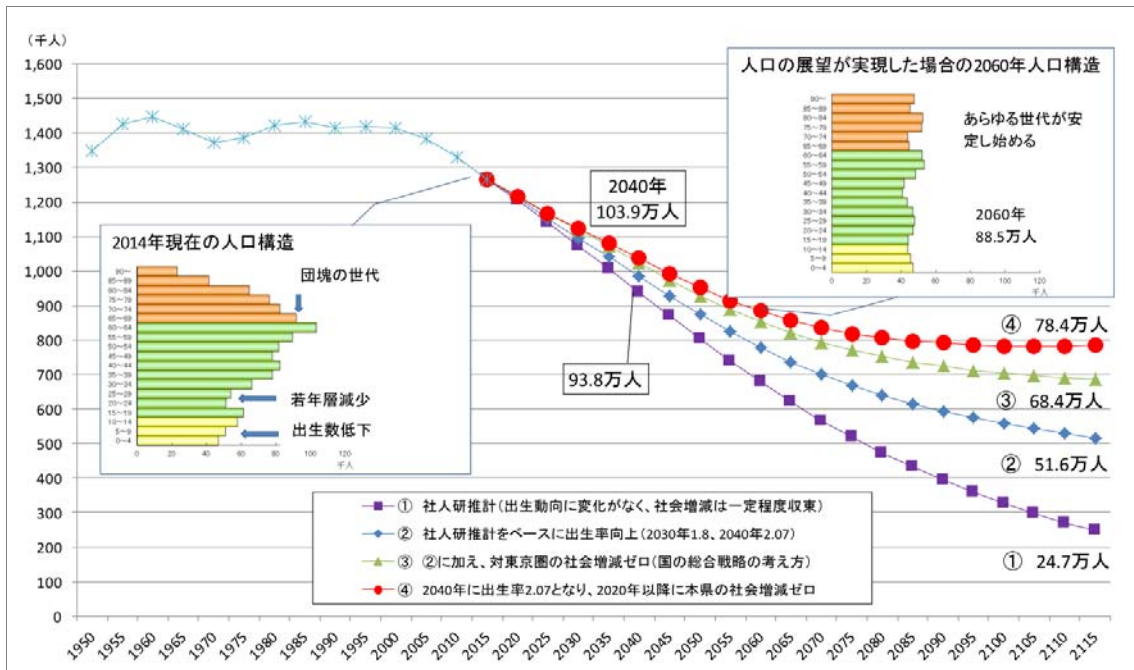
88.5万人を想定しております。

少子高齢化、人口減少は、東京一極集中と合わせて、日本全体の課題であります。地方、地域にとっては当面している厳しい問題です。

岩手県では「生きやすさ」「住みやすさ」「学びやすさ」「結婚しやすさ」につながる政策を掲げて安定した人口構造をもった「希望郷いわて」づくりに積極的に向き合っています。

それにしても、東日本大震災から5年、10年、20年経った岩手県全体の姿を想像した上での陸中海岸地域の人間居住の復旧、復興の在り方を中長期的に縮小のプログラムを用意して立ち止まって考える時期に来ていると感じます。

図7 岩手県人口の長期的な見通し



「岩手県人口ビジョンの概要」岩手県庁政策地域部

(2016.03.25)